

「狭山の文化人を知ろう」プロジェクト展示を終えて

昨年度は、故廣沢先生の助言ご指導で7人の文化人を紹介した。大きな支えを失い途方に暮れる時もあったが、いろいろな分野で経験豊かな新メンバー3人を加え、今年度が始まった。芸術祭での発表を目標に毎月の会議は活発な意見交換の場となり、今年度の狭山市民芸術祭では、故人の文化人4人と現在活躍している文化人5人を紹介することに決定。5人については、インタビュー、そして紹介文の推敲等、何度か足を運んだり、手紙やFAX交換したりして、思いもよらぬ貴重な体験をさせていただいた。

今後、文団連広報誌「文化のいぶき」への掲載、市役所や公民館での展示など、狭山市民に文化人を紹介していく場も広めていきたい。また、文化人の推薦をお願いしていきたい。

「狭山の文化人を知ろう」プロジェクトリーダー 小川豊子



書斎にて(1992年)

つむらせつこ 津村節子 作家

【経歴】

1928(昭和3)年 福井市にて誕生。病弱だった氏に、母はグリムやアンデルセンの童話集などを買い求め、読み聞かせた。氏は、少女俱楽部より少年俱楽部が好きで、探偵小説などに心躍らせた。またノートに日々の出来事を書くことを楽しみとしており、漠然と「自分は体が弱いため普通の生活ができないから家で小説を書いていきたい」と思うようになる。母は、津村が9歳の時に死亡。13歳、東京府立第五高等女学校に入学。しかし、戦争が激しくなり母の実家を頼って疎開。16歳、父は福井にて心臓麻痺のため急死。学習院女子短期大学に進み、大学の文芸部で吉村昭氏と出会い結婚する。その後、37歳「玩具」で第53回芥川賞受賞。女性の芥川賞受賞者としては6人目。平成28年文化功労者として顕彰される。

【狭山市との関わり】

「狭山は第二のふるさとです」と述べる津村氏。空襲を逃れて母の実家のある入間川町に、祖母と姉妹3人の女世帯が疎開する。自伝的小説「星祭りの町」には当時のことが生き生きと綴られている。敗戦の非常な衝撃、航空士官学校がジョンソン基地に。米兵への恐怖、ジープに乗って嬌声をあげる娼婦たち。氏は目黒の焼け跡に建てられたドレスメーカー女学院に通学。姉と共に町の大通りに洋裁店を開く。店の前には、呉服店や雑人形店、洋品店などが寄り合って開いたスーパーニアショップ。七夕祭りに参加して、ウェディングドレスを着せた人形を吊るして話題となった。稻荷山、入間川の河原、八幡神社等、当時の入間川の町の様子も多く描かれている。

～著書「星祭りの町」～より

すずきのりお 鈴木至夫 日本画家

【経歴・狭山市との関わり】

1929(昭和4)年 神奈川県茅ヶ崎町(現在茅ヶ崎市)で生まれる。東京芸術大学日本画科に入学。当初、油絵にこだわったが、日本画教授に褒められたことから日本画に本格的に取り組むようになり、芸大卒業後、日本美術院展覧会(院展)に初入選。中学の美術の教師となり、同窓生の年子さんと結婚。子どもが生まれ、アトリエを探そうと都内から家探しに出て狭山市入間川に住宅を購入し住む。1975年のこと。さらに、狭山市富士見のマンションにアトリエを持った。狭山に住んで43年になる。30代になった頃、芸大時代の恩師から「今までの画風をつぶすつもりで風景画に挑戦したら」と言われたのがきっかけに、厳冬の厳しい雪景色を多く描くようになった。学校の冬休みを活かして厳冬の北海道、東北、北陸などを歩き回った。北海道小樽市の日和山灯台を描いた「北海冬陽」など灯台シリーズも描いた。厳冬の漁村にわずかに電灯の明かりが人の生活を示すという「礼文冬晨」など独自の画風を築き上げた。院展を中心に活動、院展奨励賞などいろいろな賞を得ている。日本美術院特待。1975年に紺綬褒章を受章。



「北海道・神威岬灯台と自画像」を背に